

第1日 ▶

8/30 土

13:00~16:10

13:00~13:15 オリエンテーション・開講式

13:15~14:35 第1講 万葉集の「大津皇子・大伯皇女物語」

大浦 誠士 (専修大学教授)

天武天皇の崩御の直後、大津皇子は謀反の罪で捉えられ、刑死する。時に唯一の肉親である大伯皇女は、伊勢の斎宮にあった。巻二の相聞部と挽歌部には、大津刑死の前後の歌が、一連の歌として掲載されている。本講義では、それらの歌を、万葉集の描く「大津皇子・大伯皇女物語」として読み解いてみる。そこに析出してくるのは、姉大伯皇女の弟への「愛」であろう。



14:50~16:10 第2講 山上憶良の情愛 — 父と子 —

西 一夫 (信州大学教授)

『万葉集』の第三期を代表する歌人である山上憶良は、他の歌人とは異なる観点から家族を主題に据えて歌を詠んでいる。そうした作品からは、憶良という律令官人として、また歌人として奈良時代を生きた姿が見える。山上憶良が殊更に子どもへのまなざしを持ち続けた意図は奈辺にあるのか。憶良自身が自らの老いと子への情愛とを取り合わせている姿勢を見せる作品を起点に、山上憶良が持ち続けた「父と子」の情愛について述べる。



第2日 ▶

8/31 日

9:30~14:45

9:30~10:50 第3講 防人とその家族

廣岡 義隆 (三重大学名誉教授)

防人歌は、突然の徴兵に赴かなければならない青壮年の生き別れに関わる歌々です。この中には、父や妻の歌もあります。当時、東国では、都文化を摂取し都の倭歌文芸を身に付けた人が既に少なくはありませんでした。この生き別れは、当時の状況下では、再開を保障するものでは全くないという極限状況の中で、心の叫びが珠玉の歌という形になりました。当時の家族の実態を確認しつつ、防人歌に見られる愛の姿を確認して行きます。



11:05~12:25 第4講 花をめぐる家持と書持

針原 孝之 (二松学舎大学名誉教授)

家持は越中守として着任後まもなく書持の訃報を聞いた。この弟の死は家持の経験した三度目の死となる。最初に遭遇して歌を詠むのは亡妻悲傷の時、二度目は安積皇子の薨ぜし時、三度目は弟を哀傷する時である。この弟の死の歌中に「花草花樹を好愛でて」(自注)がある。書持が花を愛する心やさしい人と理解している。また天平十二年に書持が詠んだ「太宰の時の梅花に追和する新しき歌六首」は、以前天平二年に父旅人が主催した「梅花の宴」を回想して詠んでいる。家持も父旅人の作品に影響を受けている。家持と書持の作品から兄弟愛の姿をとらえ述べてみたい。



12:25~13:25 昼食

13:25~14:45 第5講 母と娘 — 大伴坂上郎女と二人の娘 —

遠藤 宏 (成蹊大学名誉教授)

大伴坂上郎女には、坂上大嬢と坂上二嬢という二人の娘がいる。この三人は実の母娘の関係にあるのだから強い絆で結ばれているであろうということは十分に予想されることである。本講においては、その強い絆が、万葉集に残された三人に関わる歌にはどのように表現されているのか、極力丁寧に歌のこぼれを分析しながら探っていきたいと考えている。



歴史館の最新情報、日々の出来事はこちら!

- ツイッター 家持くん @manreki いけぬし君 @ikenushi おおいらつめちゃん @oiratsume
- 万葉人・高岡市万葉歴史館館長 @akahitomusimaro
- 坂本信幸万葉日記(館長ブログ) <http://www.manreki.com/kancho/>

